様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １７ 日現在

機関番号：１２６１３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ０１１８７

研究課題名（和文）「持続可能性」の彫琢：エクアドル、ボリビア、コロンビアの比較研究

研究課題名（英文）The Elaboration of 'Sustainability': A Comparative Study of Ecuador, Bolivia and Colombia

研究代表者
大杉　高司（OSUGI, Takashi）

一橋大学・大学院社会学研究科・教授

研究者番号：１０２９８７４７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、エクアドル共和国がアマゾン地域のヤスニ地区に埋蔵する原油を採掘せずに地中に留めることに対して国際的補償を求めたヤスニITTイニシアティブを研究対象とし、それを人類学における贈与論とフェティシズム論の枠組みから分析することで、本イニシアティブが持っていた潜在的可能性を明らかにする。
　調査と分析を通じて、本イニシアティブが、自然からの本源的な贈与を反復する「譲渡不可能なものの譲渡」であり、「原油を地中に留める」ことがもつ価値の多層性と複数性を示しながら、贈与と市場交換、南と北、自然と人間のあいだの部分的つながりを体現する可能性を秘めていることを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　人新世の時代に、地球温暖化抑止の方策を模索することは喫緊の課題となっている。本研究が着目したヤスニITTイニシアティブは、既存の排出権取引あるいはその延長線上で模索されるREDD+（森林減少・劣化からの温室効果ガス排出削減）の問題点を乗り越える試みとして注目される。本研究は、政治生態学や生態経済学（または環境経済学）とは異なる視点から、とくに先住民社会で頻繁に観察されてきた贈与行為やフェティシズムと比較検討することで、本イニシアティブのこれまで見逃されてきた潜在的可能性を明らかにした点で学術的、社会的意義を有する。

研究成果の概要（英文）：　This study focuses on the Yasuni-ITT Initiative, in which the Republic of Ecuador sought international compensations for leaving the crude oil underground, and analyzes it from the framework of anthropological theories of gift-giving and fetishism so as to identify its potential.
　We argue that the Initiative is better understood as an "alienation of inalienables", which repeats the primordial gift-giving from Nature, and that with its muti-layered and multiple estimation of the value of the keeping the crude underground it could embody the partial connections between Gift and Market, South and North, and Nature and Society.

研究分野：文化人類学

キーワード：文化人類学　ヤスニITTイニシアティブ　原油　贈与　フェティシズム　部分的つながり　自然契約　人新世

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

(1)エクアドルのコレア元大統領は、在任中の 2007 年、アマゾン熱帯雨林のヤスニ国立公園 ITT 油区に埋蔵する 8.46 億バレルの原油を採掘せずに地中に留めることに対して、国際社会からの補償を求めるヤスニ ITT イニシアティヴ（以下、ヤスニ）を提起した。ヤスニは、2010 年に国連開発計画の後ろ盾をえて、同量の原油が消費された場合に排出される 4.07 億トンの二酸化炭素の国際取引価格、すなわち 72 億ドルの半額の拠出を、エクアドル政府が発行するヤスニ保証債（以下 CGY）と引き換えに求め、内外の高い関心を集めた。しかし、国際社会からの拠出額は目標額に達せず、コレアは 2013 年にヤスニの撤回を宣言するに至る。

(2)これまで、ヤスニに関して主に生態経済学、政治生態学の視座から研究が進められてきたが、それらはヤスニの失敗の原因を、ヤスニが提起する温暖化抑制の枠組みが、既存の排出権取引さらにその延長上で模索される REDD+（森林減少・劣化からの温室効果ガス排出削減）の枠組みと、重要な点で齟齬をきたしている点に求めている。既存の排出権取引と REDD+は、化石燃料が既に採掘されたことを前提に、「事後」的に温暖化ガスの総量をコントロールしようとするものだが、ヤスニは原油が採掘・消費された場合に排出される温暖化ガスの取引価格を、「事前」に原油を地中に留めることの価値に繰り込もうとする点で、異なってる。さらに、REDD+は温暖化ガス吸収源たる森林の劣化抑止・保全に取引可能な価値を賦与するが、ヤスニとのあいだには着目点に地表（森林）と地中（埋蔵原油）のあいだのギャップがある（Martin 2014）。こうした国際的枠組みとの齟齬が、CGY の流通可能性を棄損し、その価値の下落を予期させ、さらにエクアドル政府がやがて採掘を再開するのではないかとの不信を醸成してきたとの指摘がなされてきた（Pellegrini et al. 2014）。

２．研究の目的

本研究は、ヤスニを人類学の視座から再分析しそこに内在していた潜在的可能性を明らかにすることで、その試みが温暖化抑制のための今後の模索の一つの参照点になりうることを示すことを目的とする。とくに１．(2) で触れた既存の排出権取引とヤスニの間にある二つの齟齬、すなわち事後と事前のあいだ、地表と地中（＝表層と背後）あいだの齟齬を、文化人類学がその学史を通じて再解釈・再提起しつづけてきた贈与およびフェティシズムの問題系を通して再分析し、それら齟齬が乗り越えられないものであるどころか、贈与とフェティシズムのそれぞれがその本質的な性質として内在させてきた二重性の現れであり、ヤスニがその二重性を多面的に体現していることを明らかにする。

３．研究方法

(1)本研究は、文献研究と資料分析、エクアドル共和国におけるフィールドワークの両面から推進した。

①文献研究では、ｉ）ヤスニのみならず排出権取引や REDD+など温暖化ガス排出抑制に係る主に政治生態学、生態経済学の文献の精読と分析、ii）贈与とフェティシズムに関する人類学の古典的著作の精読と分析、iii）エクアドルをふくむアンデス地域における先住民の思想や実践の人類学文献の精読と分析、iv）iii）の思想と実践を「自然権論」へと翻訳しようとする試みについて、人類学、政治学、法律学ほか隣接処分野の文献の精読と分析を実施した。

②2019 年 2 月～3 月に実施したフィールドワークでは、政府関係者、研究者、活動家、企業家、ジャーナリストなどに対して、ヤスニの反対者・賛同者の別にかかわらずインタビューを実施したほか、鉱山開発による水質汚染反対運動での参与観察、およびアンディアナ・シモン・ボリバル大学院大学およびクエンカ大学でのシンポジウムの共同開催と研究代表者自身による講演を実施した。とくに講演では、多様な聴衆とヤスニをめぐって対話することで多くの具体的知見を得た。なお、2020 年度以降はコロナ禍によりフィールドワークの実施を延期せざるをえず、複数年にわたり補助事業期間延長承認をうけてきたものの、延長最終年度の 2023 年度にエクアドル全土の治安悪化にともなって非常事態宣言が発令されたため、中止せざるを得なかった。結果、

2019 年のフィールドワークで入手した多様な資料をさらに深く分析することとなった。

4. 研究成果

(1) ヤスニの贈与としての側面

①．１．(2)と２．(1)で触れた事後と事前の問題は、より具体に沿って記述するならば、既存の枠組みが原油を採掘した「後に」放出される温暖化ガスの負の価値ないしガスを吸収する森林の正の価値を取引対象にするのに対し、ヤスニが原油を地中に保持したまま、採掘という事実性の「前」に CGY を取引する点にあらわれている。別言すればヤスニは「(原油を) 取引しないのに、（それに代わる CGY を）取引する」という一見不可解な二重性を示している。しかしこれをを保持と譲渡の二重化とみなせば、アネット・ウェイナーが「保持しつつ与えること」を贈与論の中核にすえて以来、人類学になじみ深い現象のいまひとつの現れであると再分析することができる（Weiner 1992)。贈与論の文脈で理解されてきたのは、集団の同一性と密接に関わるために、たとえ他集団の手に渡ったとしても決して（あるいは稀にしか）譲渡されることのない財＝聖物と、その財の形代として相対的に容易に譲渡される財が区別されること、そして、にもかかわらずこの両者の重ね合わせこそに贈与の体制の基盤があることだった。この観点から、国際資本の資源搾取に苦しめられてきた他の諸国同様にエクアドルにおいても原油をはじめとする地中の鉱物が強くナショナリズムと結びつき聖化される傾向があること、さらに CGY が原油の形代として譲渡されながらも、そこにどこでも流通可能な炭素クレジットとは異なる強い有徴性が刻まれていること、そしてなにより、ヤスニが「取引しないと同時に取引する」ことを二重に要求していることは、驚くべきことではない。

②さらに、人類学においてよく知られる古典的事例（ハウ、マナ、ポトラッチ）において、この同じ財＝聖物が、私たちが「超自然」と呼ぶ環世界から神話の始原においてあらゆる人間的事象に先だって（＝事前に）授けられたものであり、またその保持としかるべき取り扱いが「超自然」的力に充満した「自然（森や動植物）」の更新と再生にとって不可欠であると観念されていたことも重要である（サーリンズ 1984［1972]、ゴドリエ 2000［1999]、Graeber 2001)。この視座からは、ヤスニを先進諸国「からの」贈与（＝援助）を求めるの枠組みと見なし、そこに受贈者たるエクアドルを劣位におく論理だけを読み取る思考は、きわめて一面的であるといえる (cf. Bentha11 2001)。原油をしかるべく取り扱いその形代を譲渡することで贈与をしているのは、経済を含むあらゆる人間活動を基盤から支える「自然」の更新と再生の可能性を世界に対して差し出したエクアドルであることが了解できる。エクアドルが受贈者であるとすれば、それは「自然」との関係においてである。この意味でエクアドルによるヤスニの提起は、グローバル・サウスからグローバル・ノースへの贈与の提起であると同時に、「自然」から人間への始原的（事前の）贈与の（事後的）反復でもあると捉えることができる。

(2)ヤスニのフェティッシュとしての側面

①他方、地表（森林）と地中（埋蔵原油）の問題系を新たに捉えなおし、同時に民族誌上の「超自然」と人新世時代の「自然」を比較するための足場を提供するのは、フェティッシュに「啓示と隠蔽の弁証法」を駆動する力を見いだしたマイケル・タウシグである（Taussig 1999)。タウシグは、表層にあるフェティッシュとそれに隠された「背後の何か」のあいだのダイナミズムを捉えようとする。たとえば国旗と国、貨幣と価値の関係のように、表層（国旗、貨幣）は常に「表層に過ぎぬもの」として棄損される運命にあり、その棄損によって「より重要な」背後（国、価値）の真の姿の啓示が与えられるかのような様相が到来するが、その啓示の瞬間にその背後は不分明で捉えがたいものとなり、私たちを再び表層に差し戻す。REDD+の枠組みにおいても、地表（表層）にある森林に拘ることは、原油を地中（背後）に留めつづけて温暖化ガスを排出させないという、より重要な課題を覆い隠す作用を発揮している。しかし REDD+を退け、地中（背後）に原油を留め続けることの真の価値を算出しようとするあらゆる科学的試みもまた、絶えず私たちを多層的で複数的な表層に差し戻し続ける。コレア（元）大統領が提示した 72 億ドルとの価値づけは、環境経済学、生態経済学、政治生態学、地球システム科学などによる様々な試算により絶えず書き換えられてきた。ヤスニにより伐採を免れる森林、破壊を免れる他のエコシステム・サービス、生物多様性や先住民の保護 etc.を価値計算に算入するかどうかを巡って盛んに議論が交わされ、その貨幣換算総価値は 256 億ドルとも、328 億ドルとも算出しなおされる。くわえて、政治生態学の「生態負債」の概念は時代をさかのぼって先進工業国の負債を膨れ上がらせ、気象学や地球システム科学の「炭素予算」の概念は未来にわたる収支を現在に繰り込もうと

している。つまり、値札や一覧表にどんな数値が書きこまれようとも、それは背後にあって正確には把握できない超客体（Morton 2013）の形代として、仮初に表層に浮かび上がっているに過ぎない。さらにくわえて、ITT 油区に埋蔵する原油は世界の総消費量のわずか 10 日分にすぎず、温暖化ガスも地球の環境システム全体のありようを想像するための、無数にある中のたった一つの手掛かりにすぎない。ヤスニが体現する表層と背後のギャップは、それ自体が表層となって、私たちを巻き込みつつある幾重もの深み、決して飽和することのない多数体としての全体を、その小さな具体性において示している。

②他方、ヤスニにおける原油を地中に留めることの価値算出には、つねにアンビバレンスが伴ってきた。コレアによる 72 億ドルの価値提示が左派政権を維持するとともに国際的プレゼンスを高めようとする政治的策略であるとの批判うけてきた一方、さらにラディカルな政治生態学や生態経済学の立場からは、原油を地中に留めることの総体的価値を貨幣換算価値として算出しようとすること自体が、元来市場論理化できない「自然」を強引に市場内化する試みであるとして厳しく批判されてきた。しかし、経済人類学の近年の諸成果は、贈与経済と市場経済は決して排他的に対立しているわけではなく、むしろ一方が他方の地あるいは図となることで「部分的につながり」あいながらハイブリッドな現実を立ち上げていることを示してきた（Leach and Leach eds. 1983, Thomas 1992,ストラザーン 2015［2004］）。そして、ヤスニもまたこれと同種の「部分的つながり」を体現することによって新たな可能性を提示しているとの理解を補強するのは、フェティッシュ概念の発生を歴史人類学的に振り返るデイヴィット・グレイーバーである（Graeber 2005）。グレイバーは、フェティッシュ概念が 16 世紀から 18 世紀の西アフリカ黄金海岸でヨーロッパの商人と現地人が接触する過程で造られた概念であること、さらに重要なことにこの概念が同時代のヨーロッパで同時発生した社会契約論と同じ背景と想定を共有していたことを跡付けている。すなわち両者は、競争的な市場交換の昂進という同じ背景のもと社会的合意は社会全体を覆う力（ヨーロッパにおいてはリヴァイアサン、西アフリカにおいては呪物＝フェティッシュ）によって担保されるとの想定を共有している。この観点から私たちには、ヤスニを、グローバル・ノースとグローバル・サウスの接触領域で、贈与と市場の狭間で産み落とされようとした未完の社会契約として、さらに４．(1)②でしめした観点を併せ考えるならば、人間と「自然」の対立を越えて立ち現れようとする「自然契約」（セール 1994［1990］）の先駆けとして捉える視座を、手にすることになる。

（参照文献）

ゴドリエ、モーリス 2000 『贈与の謎』、法政大学出版局

Graeber, David. 2001 *Toward an Anthropological Theory of Value.* Palgrave Macmillan.

Graeber, David. 2005 Fetishism as Social Creativity: or Fetishes are god in the process of construction. *Anthropological Theory*. 5(4), 407-438.

Leach, Jerry and Edmund Leach eds., 1983 The Kula: New Perspectives on Massim Exchange. Cambridge University Press

Martin, Pamela L., 2014. Ecuador's Yasuní-ITT initiative: Why did it fail? Articles and Debates 5.2, Ecuador's Yasuní-ITT initiative: What Can We Learn from its Failure? International Development Polity. https://journals.openedition.org/poldev/1705#text, Accessed in 18 August, 2019

Morton, Timothy 2013 *Hyperobjects: Philosophy and Ecology after the End of the World.* University of Minnesota Press.

Pellegrini, Lorenzo Murat Arsel, Fander Falconí and Roldan Muradian, 2014. The demise of a new conservation and development policy? Exploring the tensions of the Yasuní ITT initiative. The Extractive Industries and Society, 1(2).

サーリンズ、マーシャル 1984 『石器時代の経済学』、法政大学出版局

セール、ミッシェル 1994 『自然契約』、法政大学出版局

ストラザーン、マリリン 2015 『部分的つながり』、大杉高司ほか訳、水声社

Taussig, Michael. 1999 *Defacement: Public Secrecy and the Labor of the Negative.* Stanford University Press

Thomas,Nicolas, 1992. The Inversion of Tradition. American Ethnologist 19(2), 213-232.

Weiner, Annette B. 1992. Inalienable Possessions: The Paradox of Keeping-While-Giving. University of California Press.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 大杉高司	４．巻 －
２．論文標題 原油を地中にとどめることーエクアドルの「ヤスニＩＴＴ イニシアティヴ」と人類学のスケーリング	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本文化人類学会 第53回研究大会抄録集	６．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大杉高司	４．巻 3429
２．論文標題 「ともに生き残る」術をマツタケから学び取る－制度化されえない多様な潜在的コモンズのありようを予期させる、薄明かりの希望：アナ・チン『マツタケ』	５．発行年 2019年
３．雑誌名 図書新聞	６．最初と最後の頁 2－2
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　2件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 大杉高司
２．発表標題 原油を地中に留めること：ヤスニITTイニシアチブと人類学のスケーリング
３．学会等名 日本文化人類学会第53回研究大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Takashi Osugi
２．発表標題 Inmanencia de los nuevos contratos socioculturales: Una especulacion antropologica sobre la iniciativa Yasuni-ITT
３．学会等名 Formas De Lo Humano XL: Por una Antropologia de Contemporaneidad（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Takashi Osugi
２．発表標題 Iniciativa Yasuni-ITT: Una especulacion antropologica
３．学会等名 Iniciativa Yasuni-ITT: Un dialogo entre la Economia Ecologica y la Antropologia. Unidad de Informacion Socio Ambiental, Universidad Andina Simon Bolivar（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計2件

国際研究集会 Formas De Lo Humano XL: Por una Antropologia de Contemporaneidad, Universidad de Cuenca.	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 Iniciativa Yasuni-ITT: Un dialogo entre la Economia Ecologica y la Antropologia. Unidad de Informacion Socio Ambiental, Universidad Andina Simon Bolivar	開催年 2019年～2019年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
エクアドル	Universidad de Cuenca	Universidad Andina Simon Bolivar		